

昭和三年二月十六日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

# 聖書之真理

參月號

第十四號

主筆 江原萬里

既に聽かれたる祈

主筆

ロマ書の釋述

江原萬里

本書翰の大提唱（下）

内村先生の舊著小憤慨錄を讀む

江原萬里

先生の著作概観

日清戰爭義戰論  
文明發達の主動力

我等の最大事業

藤本武平二

柏木通信

齋藤宗次郎

自由

佐々木良伍

アブラハム・リンコーン

編輯餘録

昭和六年三月一日發行

## アブラハム・リンコーン

米國奴隸解放戰爭に際し、南軍遂にリチモンド市を陥れた翌日大統領アブラハム・リンコーンは民衆歡呼の裡に入城した。人々は帽子を高く掲げ、ハンカチを振り、歡び躍つて之を迎へた。其の時一人の老いた黒人が感謝の涙にむせび乍ら『神様、大統領リンクムを御慕み下さい』と叫び、帽子をさつて禮をなした。大統領は自分も脱帽して無言のまゝ、之に答禮した。それは數百年來の法律慣例に反し、世の紳士道の打ち毀しであつた。群衆は大なる衝動を受けた。『黒人坊にお辭儀をするなんて』と呟いて顔をそむけて去つた者もあつた。

或る日は外出しやうとして門前には護衛の黒馬隊が待つて居た。彼は白亜館の玄関から、門口に出た時、或る質素な服裝をした面會人が何か難問題を持ち掛け、急にそれを聽許し兼ねた。面會人が陳情して居る間、大統領はしげしげその顔色を見詰めて居たが、やがて語り終えた時『君は何が書く物をもつて居るか』と尋ねた。そして紙片と鉛筆を借りて、大統領は鐵欄の下に在る低い數石に腰を下ろした。それは舗道から五寸も高くない位で、まるで路面に坐つて居るやうに見えた。そこで紙片に『此の者の要件取調あり度し』と書いて渡した。それを書いて居る時、一國の元首が事もなげな有様に周圍の護衛兵など顔見合せて笑つた。然るに大統領は自分の態度がどうか、それを人がどう見るかに一向氣兼ねる様子がなかつた。まことに天真其の儘、善良その者であり、如何に彼の品性の高貴にして、一意ごんな賤しい者に對しても共和國の市民として之に仕へ、常に公平ならんとする念以外何者もなき有様であつた。

リンコーンは或る時國務上激しく非難された。それは事實の誤解から來たものであつた。其の非難の根據のない事の完全な證據をもつて居る者が大統領に『私が新聞に書いてその事實を明白にしても宜敷いでしょうか』と尋ねた。リンコーンは答へて『いや、いや、いけない。少なくとも今は其の時ではないよ。私に加へられた他人の攻撃を一々調べて之に答へて居た日には、私の仕事は轉業した事になる。私は一生懸命自分の出来るだけ正しいことをやつて居ればよい。そしてそれを仕上げればよいのだ。出來上つた後でそれが正しかつた事が明白になつたなら、非難は何にもならないではないか。若し私のした事が間違つて居たならば、十人の天の使が私を辯護してくれても無益だ。』

戰爭中脱走兵や其の他軍律違反で死刑の宣告を受ける者が多くあつた。それらの者の母や姉妹や友人たちは大統領に手紙を送り、又自分で面會し(面會するのは骨が折れた)、リンコーンに特赦を乞ふた。リンコーンは多忙中にも拘はらずいつも辛抱してその陳情を聞き、多くはその願を聞き上げた。彼は言つた。

私が度々特赦をするので將軍たちは軍規が保たれないと云つて不平を言ふものがあるを聞くが、一日中難かしい仕事で身も心も勞れ果てたとき、人命を救ひ得る何かの理由を發見し、其の者を赦す位慰めざるものはない。其の夜は赦された者の家庭や友人たちがどの位喜こんで居るであらうかを想像して床に就く身の幸福たらぬよ。

そう言ひつゝ、彼は一國の重荷を負う心盡くしに深く刻まれた顔面に微笑を漂よはせて赦免狀に署名するのを常とした。

# 聖書之眞理

## 第四十一號

昭和六年三月一日發行

### 既に聽かれたる祈

主 筆

我らは祈りて神に聽かれざることは一つもない。何ごなれば眞にキリストを信する者は既に聽かれたる祈を祈りつつあるからである。

何をか我らは祈りつつある。人々相互の間に純眞の愛ありて互に愛せんことを祈りつつある。戦の噂聞えず、その準備をなさざる地上永久の平和を祈りつつある。産業は盛となり、貧乏は全く絶滅せんことを祈りつつある。人々の身體は強健となり、病患は之を見ることなきに至ることを祈りつつある。人々の家庭は春の如くに溫和に歡喜に溢

れんことを祈りつつある。永久に死別の悲痛のなからんことを祈りつつある。そして此等の祈りは既に我らの主イエス・キリストに在つて聽かれたる祈である。

それ神はその獨子を賜ふ程に世を愛し給へり。すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んがためなり(ヨハネ傳三章十六節)。

主イエス・キリストを救主として信じ之を我らものごして、我らは神からその富の全部を既に與へられたのである。キリストとは誰ぞ。『キリストには智慧と知識との凡ての寶藏かくれあり』天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、見えぬもの、……みな彼により……彼のために造られ……凡ての満ち足れる徳を彼に宿し『コロサイ書一章及二章』て之を我らに賜ふたのである。彼を我ものとして我らは既に凡ての物を所有して居るのである。只彼の顯はれ給はんことを待つのみである。

# ロマ書の釋述

江 原 萬 里

## 本書翰の大提唱 (下)

さらば何故神はかかる愛を顯はし、唯主イエス・キリストを信する信仰あらば、自ら何の功績なく、何の能力なく、否神に敵し、キリストを迫害せる者にも救を得させ給ふのであるか。此の事を宣傳ふる福音は何故凡て信する者を救に至らしめるか。何故神は私を召して使徒とし、かかる事を宣傳へしめ給ふのであるか。それは

17 神の義はその福音のうちに顯はれたからである。

### 義の意義

抑も義とは何であるか。それは人間最高の生活原理、而して人間至上の生活目的である。決して

それはプラトーンが教えたやうな、智慧、節制、勇武と相並べて人間の四徳の一とした正義、即ち、人々に對しては公平であり、自分自身に就ては正にして邪なきこと、換言せば正義公平と言ふが如き、人の高貴優秀、當に賞讃すべき一つの徳を言ふのではない。ここに云ふ義はそれ以上のものである。人間が人間として當に生くべき至上の道、當に到達すべき最高の目的を言ふ。人はこの義を體達して始めて、その創造主なる神に對して義しき關係に立ち得、神と偕に歩み、神の天地萬物と人類創造の御旨に適ひ得るのである。

それ故義とは第一に人間がその過去の生涯に於て神の聖前に一點の罪をも行はなかつたことを言ひ、第二に神の御意ごいに適ふて人間として爲すべき凡ての善を悉く成就したことを言ふ。之を反面から言へば、異邦人の如く罪を犯さず、ユダヤ人に示されたる神の聖意なる律法を一點一劃も缺かさ

す實行したことである。此の二つあつて人は始めて義を得たのである。

人の救はれるのは此の義を得ることに由る。此の義を有たずして人は絶對に救はれる事はない。『福音は凡て信する者に救を得さす神の力』である理由は、人に此の義を得さすからである。抑も救は一面、惡に惡を重ね、罪に罪を犯したる者が當然陥る淪落遂に暗黒滅亡の運命を受けず、他面神の期待し給ふ善、律法の命ずる聖潔を成就し、遂に靈魂は永生を、身體は不朽榮化を得ることである。神の創造の御旨に適うて、神と偕に永遠に歩み、神の榮光の輝きを反映することである。義人にして始めて、此の救を得るのである。

されど人間は悉く神の前に罪を犯し、惡を行ひ、今や自ら義人たり得る者は全地球上一人だにない。諸君若し之を疑はゞ自分自身を驗して見よ、諸君のうち誰か、我こそは義人であると言ひ得る者が

あるか。若し何人も人は自ら此の義を獲得到達し得なければ救はれないとしたならば、全人類悉く救を得る者なく、其の運命は只滅亡あるのみである。然るに今や私の宣傳するこの福音のうちに、人の救に必要條件である義が顯れたのである。それ故私は此の福音を以て救を得さす力であると言ふのである。

それは義の顯れである。然し乍ら人の義の顯れではない。ユダヤ人を始めギリシヤ人、凡ての人が自ら義を成就し得ないこと明白となつた時——此の事は直ぐ次に詳しく説明する——天から神の義が福音のうちに顯れたのである。人は之を得て始めて救を得るのである。

#### 神の義の二方面

然らば、神の義の顯れとは何を言ふか。義が人間の最高の生活原理、至上の生存目的である如く、神の義の顯れは神の最高の性質と人に對する至上

の恩恵との顯れである。それには人間の義と同じく二つの方面がある。

その第一は神の最高の御性質が明白に顯れたことである。神は嚴肅極まりなき正義であり給ふ。されば神の創造し給ふた此の大天地に少しの汚穢を容るることを許し給はず、少しの不正不義をも罰せず置き給はない峻嚴限りなき至聖至高の正義である。神の正義に直面した時は何人とも己が罪の如何に醜惡なるかを感せずには居られない。預言者イザヤは叫んだ。『禍なるかな、我ほろびなん、我はけがれたる唇の民のなかにすみて、穢れたるくちびるの者なるに、わが眼萬軍のエホバにまします王を見まつればなり』(イザヤ書六章五)と。ペテロも亦イエスの至聖を感じて『主よ、我を去りたまへ、我は罪ある者なり』(ルカ傳五章八)と云ひて、天地の自身の措き處なきを感じた。

神が其の御本性なる聖にして聖なる嚴肅極りな

き正義を顯し給ふや、それは焚き盡す猛火となつて凡ての罪と穢れとを罰せずには措き給はない。

神は今まで我らの想像を越える大なる『忍耐をもて過來し方の罪を見遁し給ひしが』(今おのれの義を顯して自ら義た)ることをあらはに示し給ふた(三章二五及二六)。神の義の顯れとは之である。それは人間の神に對する背反と惡行とに峻烈極まりなき刑罰として顯れ、神の創造し給ふた此の大天地は正義が嚴然として支配し、人の心の秘められたる奥底にまで徹底して假借するところなきことを示し給ふたのである。

然し乍ら、神の義には第二の方面がある。それは正義なる神自身から派出されて天より降り、主イエス・キリストを信する我ら罪人に無條件の恩恵として賦與し給ふ神の義である。一面神の御性質の顯れである此の義は他面、神から出で、神を離れ、人の上に留まり、人の所有とせられる義で

ある（三章二六）。我ら自ら義人たり得ない罪人は神の賦與し給ふこの神の義を獲得して、始めて凡ての不正不義は悉く之を焚き盡さずには措き給はない正義の神に義人ごされ、神の御前に、憚からずして立ち得るのである。從來神に背きて惡をなしつつあつた我らは過去に一點の罪も犯さず、神の命じ給ふた律法は悉く之を成した者ご看做され、神自ら我らご和睦やはらぎ給ひ、我らに救を得させ神の御性質に接續して神の子として神ご偕に歩み得るのである。

福音即神の義の顯現

神の義に斯の如く二方面がある。それは罪は必ず罰し給ふ神自ら義たり給ふ御性質であり、然かも又我ら罪人を罰せずして之を義人ご看做し給ふ恩恵である。由つて知る、聖なる神の聖は、唯罪を赦さず之を焚き盡す嚴格一方の正義でなく、罪人を包容し、その罪を赦し、之を己の聖に化し給

ふ神聖極りなき聖、正義にして且つ愛なることを、之が福音のうちに顯れた神の義である。

我らは福音以外に、かの如く嚴肅極まりなく、罪ごし罪は必ず罰さずでは措かず、その罰し給ふや己が獨子をも惜しみ給はない程嚴正なる神の正義を發見する事は出来ない。世界歴史は世界審判なりご云ふごも、そのうちにか程嚴正なる正義の顯れはない。又人間生來の性質のうちに、何處を省み探し求むるごも、福音のうちに顯れた如き罪の赦しの理由たり得る義なく、従つて生來のままなる人は決して神に義ごせられず、唯福音のうちにのみ、神は正義を示し且つ罪人の罪を罰せずして之を義人ご看做し給ふ『神の義』が顯れたのである。

神の義の是認獲得即信仰

果して然らば人は如何にしてその顯れを認め、その義を自分のものごなし得るか。

神の義は福音のうちに顯れ、信仰より出て

## 信仰に進ましむ

それは信仰より出でる。即ち、我らの主イエス・キリストを信する信仰のうちに此の神の義が明白に顯現され、且つ之を己の物として獲得されるのである。

神の義は前にも云へる如く人類歴史を觀察して之を觀取することを得ず、又天然を仔細に觀察して、そのうちに之を發見することも出来ない。更に又我らの心を隅なく探し求めてその内に之を見出すことも出来ない。従つて神は先づ我らの心のうちに義の萌芽を生せしめ、而して後神卒先之を認めて我らに義ありとし給ふことではない（カトリック主義）。神の義は只福音が顯現する通りに之に聽従して、主イエス・キリストこそその十字架の聖業を仰ぎ見て、そこに我らの罪は悉く罰せられた事を認め、キリストを以て新なる我とし、我らに與へ給ふた新なる義を彼に於て發見するのである。

如何に神が人間の罪に對して示し給ふ正義、それによる刑罰の嚴格なるかを知らんせば、諸君、キリストの十字架を仰ぎ見よ。又如何に神は我ら罪人を愛し、その滅ぶることを欲し給はず、その罪をキリストの十字架の死の故に悉く赦し、キリストの有し給ふ義を我らの義として、我らを義人と看做し給ふか、諸君之を知らんと欲せば自己の内を見ず、我らの罪を贖罪わがなうて復活し給ふた榮光のキリストを仰ぎ見よ（四章二五）。此のキリストの我らのために成就し給ふた聖業を福音が顯現する其の通りに之を認めて、始めて、我らの罪は悉く既に罰せられ、最早過去に一點の罪に對する責任も残らず、而して我らはキリストが我らに代つて十字架の死に至るまで從順に神の御意ごこころ是れ服ひ、その律法を悉く完うし給へることにより、我ら自ら之を行つて凡ての善を悉く成就した者と神によつて看做されるのである。即ちキリストの義を我



が義とするのである。此以外に我らは神の義を認めることは出来ない。キリストを信する信仰のみがこの義を認め、之を自己の所有とし、以て救を得るのである。

神の義は信仰を促進す

されば神の義は一方に於て我らがキリストを信する信仰により之を認め之を獲得する、即ち信仰より出でると同時に他方キリストを信する信仰を生起促進せしめるのである。即ち信仰に進ましむるのである。人々をして神を畏れかしこみ乍らも心からなる感謝と歡喜、愛と望を以て拜し、之に近づき、交り奉ることを得させ、キリストを信する凡ての罪人をして人間の最深最高の欲求を満足しめんために、此の福音は全地に宣傳へられ、人々の信仰を促がすのである。

徹頭徹尾信仰の生活

人々に救を得せしむる神の力なる神の義は、か

くの如く、神に在りては徹頭徹尾人に對する恩恵として顯はれ、人に在りては徹頭徹尾神の愛の顯れなる主イエス・キリストに對する信仰として之を受けるのである。凡て彼を信する者の上に神の限りなき愛は注がれ、心は聖められ、罪より解放され、身は强健不朽の體に甦せられ、榮光を得るのである。

録して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。

である。嘗て預言者ハバククは神の御言を告げて言つた。神の民イスラエルのうち只管神に信賴する者は滅ぶることなくして、今迫り來るカルデヤ人の侵入掠奪虐殺から救はれ、その子孫も亦多くの禍から免れ、永く約束の聖地を嗣ぎ得る。若し夫れ自己の力を頼みて、神に信賴せず、己の義による者は滅び失せんぞ（ハバクク書二章四）。

實に私は嘗て此の句に由つて偉大なる慰を得た。

私は私の神から受けた啓示は新奇なるものでなく、神は既に之を預言者の口を通じて豫じめ預言せしめ給ふて居る事を發見して驚喜したのである。(ヘルテルも亦己が罪に悶ゆること多年、ロマ書を讀んで此の句に至り、溷然再生を感じた)。

義人、それは福音の啓示する通りに唯主イエス・キリストを信する者のみが神によつてかく認めらる、此の義人は信仰によりて生く。キリストを信することにによりて、眞實義人の生活を生活するのである。即ち神と偕に歩み得、神と偕に永遠に生きるのである。神に義とせられて、神が聖に在せば、神の聖を受けて潔められ、神の榮光によつて永遠の生命、即ち救を得る。之れキリストを信する凡ての者に得させ給ふ神の力、その恩恵であつて、私の宣傳ふる福音のうちに顯はれたる神の義即ち主イエス・キリストに由るのである。

以下本論の大要

以上は私が貴地を訪問して諸君に之を傳へ、諸君がキリストを信する信仰を堅うし、信する者の上に降る神の種々なる靈の賜物を分與し、且つ諸君の信仰的生活の諸經驗に由つて私自身も勵まされ度く思ふ、私の言ふところの福音の根本的要旨である。私は此の福音宣傳のため神より聖別聖召を受けたのである。貴地訪問前此の福音を預じめ諸君に了解して頂こうと思ひ、此の書を書くに當り、先づ最初に其の要旨を述べた譯である。これから本論に入り、此の福音を釋述しやうと思ふ。

私の述べた要旨は、何人とも雖も此の福音に啓示せられた通りに主イエス・キリストを信する者は神の義を獲得して救を得ると云ふのである。其の反面、此の神の義を得ざれば、即ち信仰により神に義とせられざれば、何人も救はるることはない。否神の大なる怒、即ち人間の罪に對する大審判、死の宣告、滅亡がある。人々が福音を聞いてその示す

神の義を認め、之を信仰に由り獲得するか爲ないかは、其の者の靈魂が滅ぶか否かの分れ道である。

以下三章二十節まで

されば私は以下本論に入り、何人も主イエス・キリストを信する信仰に由り神の義を獲得し、神に義させられ、この大なる審判を免れ、救を得ると云ふ福音を説明する前、先づ以て人は何人もその過去及現在、神に對し罪を犯し、又犯しつつあり、自力を以てしては神の前に義たり得ず、従つて異邦人は勿論ユダヤ人も人類悉く神の審判を受くべきものなること、即ち神の義の顯れの反面に、神の怒の顯れある事を説こうとするのである。

三章二十一節以下五章

次て此の死の宣告から免訴され、神に義させられる道は唯一つ、即ち主イエス・キリストを信することである。神は主イエス・キリストを信する者はユダヤ人を始め異邦人悉くを義とし給ふは、

キリストの十字架の死に由る罪の赦しの結果であることを述べる。即ち信仰に由つて始めて義人と看做され得る理由なる贖罪の原理を説明する。

六章及七章

次で私は信仰に由り義させられたる「義人は信仰に由りて生くべしとある」如く、罪人のまま只キリストの救を信じて彼に一切を托して義人と看做された者は、キリストその者のうちに働き給ふて、之に聖潔を得させ、名實共に義人たらしめ、

八　　章

遂に聖靈に由り神の子たるの性質を受け、萬物復興の天地に主イエス・キリストを長子として聖なる神の家族の一員となり、永遠不朽の聖社會を實現する事を説こうとする者である。更に九章以下三章は救に關する歴史哲學を、十二章以下は信者の日常生活を説く積りである。

## 内村先生の舊著

### 小憤慨録を讀む

江原 萬里

#### 先生の著作概観 本書の價值

内村先生の著書は數十種の多きに上り、多作家の隨一と稱せられた瀧澤馬琴を遙に凌駕して居る。

最近最も大部なるものに羅馬書之研究がある。又聖書之研究誌上に發表せられた聖書に關する研究感想等を集録した研究十年、研究第二之十年、所感十年、感想十年、舊約十年等があり、其の他先生の晩年の著書は殆ど聖書に關するものに限られ、明治三十三年聖書之研究誌發刊以來、先生の社會時事に關する著書としては僅かに宗教と現世及び信仰日記がある位である。

然るに聖書之研究誌發行前又はその直後の先生

の著書には地人論あり、興國史談あり、警世雜著あり、よろづ短言と獨立短言とあり、文明評論乃至社會の時評、警世に關する著作其の多きを占め、基督教に關しては元よりその著述尠なくはなかつたが、聖書其の者の研究は殆どなく、基督教徒の慰、宗教座談、基督教問答、傳道之精神等、一般的に基督教の教義の解明又は信仰生活の説明をされたもののみと云つてよい。

即ち、先生の生涯を通じその著作を概観するとき、最初先生の興味を中心は文明であり、此の文明の原動力としての基督教であつたのが、次第に文明批評は見むきもせず、只管基督教其の者に興味が集中し、然かも、人間の思索の結果である哲學によらず、神より人間への直接の啓示として、基督教の據つて立つ聖書其の者に就き、その眞理の研究、闡明に後半生を悉く献げられたものと言ひ得る。

今私が爰に紹介しやうとする先生の舊著小憤慨録は絶版既に久しく、現在に於ては多分其の著のありしことを知る者は尠なく、之を讀む者は殆どあるまい。此の書は先生の最初期の論文感想を集録したものであつて、此の書中或る往訪の記者に左のことを語つて居られるのを見れば、此の著を以て先生の處女作と見ても差支あるまい。

近世の人に説教するを好まず、寧ろ彼等を誚ふ。知己を百年の後に求めて余が滿腔の抱負を談せんのみ。爾來余の著述する所の書皆僅に一小冊子に過ぎず。故に向後三十年を期して大著作をなし、聊か世を裨益して以て斃れん事を冀ふ。此の言を發せられた時までに、先生の著述は『僅に一小冊子に過ぎず』。それが果して何であるかは私は知らない。小憤慨録の世に出たのは明治三十一年十月であつた。その五年前既に基督信徒の慰、求安録及びルツ記の出版あり、四年前傳道の新精神、

三年前英文余は如何にして基督信徒となりし乎が出版されて居る。又此の外に愛吟と日曜講演とがある。小憤慨録は此等の著書の出版後に世に出たものであるが。そこに集録せられた諸論の多くはそれよりも先に國民の友、六合雜誌等に寄稿せられ、『知己を百年の後に求めて余が滿腔の抱負を談せん』とした著者の抱負の片鱗を現はした最初の論文を集めたものである。

爾來三十有餘年、先生の著作は先生の等身に及び、その理想は益々高く、その抱負は益々大、その研究は益々深く、その所論は之に伴ふて益々精鍊され、其の視野は『宇宙の完成と人類の福祉と日本國の隆昌』と亘つて益々該博深遠となつた。されば此の小憤慨録は實に此等の諸著述の出發點であり、且つその序論と見得べきものである。多年深淵に在つて精氣を蓄積したる神龍が雲を得て天上指して飛翔せんとする最初の一躍と見られる

のである。言甚だ簡にして直截、志甚だ鋭くして堅固、一氣に己が抱負の要點を披瀝して所信を明にせられて居るところ、後年の著作が甚だ多種多岐に亘り先生の思想の動向、信仰の中心、研究の方面を一瞥する事困難なるに比して、此の書は直に先生の要所を得さず、に絶好の書である。

題して『小憤慨録』と言ふ。それは他人が先生の所論が慷慨の氣に満ちて居るのを見てかく言つたのを其の儘に本書の名稱とされたのである。自ら謙遜して之に附するに小の字を以てせられた。小と云ふは先生に大憤慨なきにあらざれど、今は語るべき時にあらず、小を以て之に代ふと言ふにある。然し乍ら小憤慨録と云ひて、決して自己の不遇失意に對する不平録ではない。憤慨と云ふは必ずしも本書の内容に相應しきものではない。書中の大部分は平靜に然し熱心に自身の經驗と所信とを記述されたものである。小はその内容を云は

ず、寧ろ其の外形を云ふべきである。それは薄つペラの紙表紙、四六半截版、上下二卷より成り、合して四百頁程、定價上下各十五錢、扁々たる小冊子である。然かも此の中に收められたる諸論説は、教育に、宗教に、文學に、時事に、諸方面に亘つて居る。今其の目次を掲ぐれば左の如し。

教育 一、文學博士井上哲次郎君に呈する公開狀 二、

精神教育とは何ぞ

宗教 一、宗教の必要 二、誤解人物の辯護 三、我が

信仰の表白 四、基督信徒の特徴 五、永生の冀望

六、露國美術家ニコライ・ガイ

文學 一、文學局外觀 二、米國詩人 三、史學の研究

四、傳記學の研究 五、西洋文明の心髓

慈善 一、チャールズ・ローリング・ブレイズ 二、簡單

なる慈善

時事 一、日清戦争の義 二、日清戦争の目的如何

三、世界歴史に徴して日支の關係を論ず 四、膽汁

數滴 六、不平論 七、萬朝餘錄 八、世界の日本

九、農夫アモスの言 一〇、農業と社會改良との關

係 一一、日本の家庭組織

韻文 一、樂しき生涯 二、寡婦の除夜

書中井上博士に呈する公開狀の要旨は既に之を紹介した。教育勅語を『禮拜』せずとも其の精神を實際に服膺せる基督者と、之を『禮拜』しつつその精神に反し或は權者に媚び、或は淫蕩に耽ける者と孰れが不敬不忠なる。若し夫れ基督教の教義が我が國體と相容れずとせば、何故之よりも更に直接危險なる當時流行のミルやスペンサーの書を學校にて教科書として使用することを許容するかと論じたものである。此の論を讀んで感ずるところは爾來四十年我國の著しき變化である。

次に先生は精神教育とは何ぞやに於て眞の徳教の如何なるものであるかを論じ、それは只形式的に又自分の利益よりして忠君愛國を教えることではなく、『道徳の標準を吾人の確信以外に取るは停滯

的道義なり、媚俗的倫理なり』、眞の徳育即ち精神教育は『外形的虛式』によらず『利慾的意嚮に反』し、自己の確信に基き『精神に充ち盈ちたる教師が學を授くる、是れ精神教育なり』。その教材は教育勅語でなく、教ふことは忠君愛國ではなくともよい。ファラデーの理化學、リッテルの地理學、アガシの動物學等は自然科學を以てして尙善く精神教育をなした。『彼等は精神的教科書を用ゐるにあらず、彼ら自身が精神的なりし故に精神的教育は行はれしなり』。眞の教育は教師其の人による事を力説せられ、現今之を讀みて尙新しきを感じる。

『文學博士井上哲次郎君に與ふる公開狀』は先生の生涯の一記念碑として貴重であるが、本書の價値は此の論說に存しない。前に言つたやうに數多き先生後年の著作の總序論として見て價値多しと私は考へる。然し乍ら本書の眞價値はそれでもない。抑も此の書出でてより三十三年、先生の信

仰の生涯は波瀾多く、その經驗は益々豊富となり、先生の研究は深遠に、その思想は遠大となつた。果して然らば先生は此の諸論を書かれて以來信仰上又思想上何程の變化をされたか。それとも又先生は終始一貫、最初の信仰を維持し、最初の所信に少しも變説改論をされなかつたか。抑も亦如何なる點に於て進歩があり、又如何なるところに操守があつたか。此の事につき、先生の生涯を研究する者に限り本書は又と得難き材料を提供するのである。

先生の著作の内容の變遷は前に述べたやうに、初期に遡るに従つて時事に關し、文明に就きての批評が多く、宗教に就いては基督教的思想の叙述、信仰による感想の表白が多かつた。然るに聖書之研究誌發刊後は次第に全精神を神の言として聖書其の者の研究に集中され、晩年に至つてはそれ以外殆ど何の著述も出されなかつた。先生の興味の

中心の推移は之に由つても知られるのである。果して然らば、何が先生の興味の中心をかく推移變遷せしめたか、我らの興味はここに在り、小憤慨録は之が解答に有力なる材料を供する。

本書中後年の先生の思想所論と著しき相違あるものを發見する。それはここでは先生は日清戦争の義戦であることを國の内外に辯護せられ、此の戦争を謳歌せられたことである。そして此の書を讀んで知り得ることは、先生は當初文明讚美者であり、人類の創造し出す文明により眞善美の社會が此の地上に現出するものこの確信を有せられ、そして此の文明創造の原動力として基督教を重視せられたのであつた。

然るに日露戦争に際しては先生は斷然此の見解を拋棄され、戦争を罪惡とし、世論に抗し、その誤解を物ごもせず幸徳秋水等と共に非戦論を唱道せられ、次で歐洲の大戦亂が勃發するや如何なる



非戦論も又文明も人類の組織的罪惡の全體である戦争を阻止するの力なきことを痛感してキリストの再臨の希望を提唱せらるるに至つたのである。

先生の時事に關しての意見はかくの如くに變化した。それは時代の鋭利なる觀察、事物に即したる公明無私の判断より來り、人に關する見解上かくも進歩あり、そしてそれは人の力こそその創造する文明に對する大なる讚美から絶望へと極端より極端への變化であつた。之によつて知らるることは先生は理論の主義の人でなく、事實の人、經驗の人であつた事である。その奉持された主義は純理から出たのではなく事實に即した經驗の結果であつたことである。

かく人に關し、その創造する文明に對する先生の所信は著しく變化した。そしてそれは結局當初から堅く把持せられた神に關する見解の正しかつたことを確信せしめ、神に對する信仰を益々強め

られたことであつた。神に對する信仰、神に關する神學の見解は當初より少しも動搖せず、變化せず、否、最初の人に對し、文明に關する信賴と見解とが動搖し變化し、それに對する失望が増せば増すだけ、益々最初よりの神に對する信賴は鞏固となりその見解は鮮明となつたのである。ここに先生の生涯に亘る操守の不變不動があつた。

先生は最初から信仰の人であつた。然し最初は文明のための信仰であつた。ここに何者かの雜物が混じて居た。然るに晩年に至つては神のために神を信する信仰に變つたのである。信仰には易りはなかつた。只それが益々醇化され、何等のバンドを交えざる純乎たる信仰のみの人となられたのである。

## 日清戦争義戦論

先生の壯年時代の特異の色彩は、日清戦役に當り英文を以て、之を我國より見て此の戦争は正義のための戦争である所以を論じて之を外字新聞に寄書し、後之を譯して國民之友誌上に載せられた日清戦争の義なる一小論文に在る。

先生は我が國が清國に對して戦を宣せることを辯護して曰く、世に義戦なるものなしと人は言ふ、然し昔は確に有つた。ユダヤのギデオン、ギリシヤ對ベルシヤ戦役、グスタフ・アドルフスの新教のために矛を執つて立つた如きはそれである。そして義戦は今も尙有り得る。我國が清國に對する戦争はそれである。然らば何故に日清戦争は義戦であるか云ふに、是れ我國が西郷隆盛以來二十年隱忍持重、忍ぶべからざるを忍び來つて、今や彼の國の暴戾傲慢を膺懲するがためである。

然し乍ら、此の戦争の義戦なる所以は只單にそれだけではない。もつともつと深いところに其の理由がある。抑も何が此の戦争を促したか、日清戦争の意義は爰に注目するとき自ら理解し得る。而して我らは此の問題に對して、人類の進歩を示す世界歴史の見地に立つて考察しなければならぬ。此の見地よりせば日清戦争の勃發することは人類進歩上必然であつて、避くべからざるものなることが解るのである。

かの波斯對ギリシヤ、カルタゴ對ロマ、スペインのフヰリップ二世對英のエリザベス女王の大戦争の跡を見よ。凡そ『新文明を代表する小國が舊文明を代表する大國と相隣りして、二者必死の衝突に來らざる事は歴史上未だ曾て其の例を見ず』。而して東洋に於て新文明を代表する小國日本の勃興は必然に舊文明を代表する、近接の大國支那と闘争を醸さざるを得ない。實に『日本は東洋に於

ける進歩主義の戦士なり』、而して日清戦争は東洋に於ける文明進歩のための戦争である。それは昔に『吾人の尊載する天皇陛下が其の臣下に施せし偉大なる事業に止まらずして、亞細亞の億兆が將にその餘澤に浴せんとしつつあるなり』此の故に日清戦争は義戦である。

先生が日清戦争を辯護し、之を謳歌せられた論據は上述の如く人類の進歩、文明の發達上必然不可避であり、且つそのために必要不可欠であること云ふに在る。この論據は小憤慨録中に収録せられた世界歴史に徴して日支の關係を論ずに稍詳細に記述されてある。曰く『日支兩國の關係は新文明を代表する小國が舊文明を代表する大國に對する關係なり』。此の關係は必然に戦争に導く、何ごなれば

『舊は大なる故に新を侮り、小は新なる故に大を賤しむ。二者の衝突は免るべからざる所、正

流逆流の相接するところ、之をして平和に經過せしめんと欲す。是れ宇宙の大理に反するもの、歴史の趨勢に逆ふもの、平和を愛して進歩を憎むものなり』。

人類の進歩は世界の平和以上であるこの所論である。そして先生は人類の進歩は鬭争を経たる後に於て來ると信せられた。かの大戦争に勝利後國運の隆昌、文明の著しき發達ありたる最も著しき例は、國運を舉げて波斯と戦ひて大勝を得たる後のギリシヤである。

『ベルシヤ斃れざる以上はギリシヤの膨張は期すべからず……波斯戦争後の結果は數ご量ごに對する精ご質ごの勝利なりし、肉に對する靈の勝利なりし、禽獸力に對する人智の勝利なりし。勝ちて智ご勇ごは世界を支配するに至れり。大波斯敗れて人類は禽獸力に信用を置かざるに至れり、ギリシヤの勝利は人類進歩の爲め必要な

りき。波斯の敗北は進歩歴史の要求する所なり。

ギリシヤの隆昌は實に此の苦戦後に在りき。

夫のギリシヤ文明と稱して歐を化し、米を度し、二千五百年後の今日に至るも尙吾人の思想を導くものは實に波斯戦争の好結果として後彼の上に興りしものなり』。

然らば人類の進歩は何故闘争の結果として其の後に生ずるか。新文明の發達は大戰争に勝利を得たる後にあらでは興らないか。闘争を経ず、平和的手を以てしては、人類の進歩、文明の發達は之を期待し得ないか。之に答へて言ふ。

『新理想が其の實果を結ぶは必ず先づ大強力に勝ちて而して後に在ること是なり』と。

人類の進歩を代表する國家の興隆、其の中に包藏せられた新理想の發現躰達には先づ大なる試験を経ることを要する。大なる患難に遭遇し、身心を苦しめ、大敵と戦ひて之に打克ちて、然る後に自

他共に其の實力を知る。而して其の上に立つて始めて自由なる進歩、妨げられざる發展がある。ここに先生の自然科学と人類歴史を根據として深い思索がある。

先生は此の見地よりして日清戦争を謳歌し、

『我に大理想あるも、之を實行し能はざる所以のものは、我未だ發達の試練を経過せざればなり。我が黄金時代は舊文明を代表する大國と衝突し、之に打ち勝ちて後に在り』

此の故に我國が矛を執つて戦ふに至つた目的は甚だ高遠である。

『日本にして敗れんか、東洋に於ける個人的發達は妨阻せられ、自治制度は廢滅し、美術は失せ、文運は廢れ、亞細亞の舊態は長く東洋五億の生靈を迷夢の裡に保持せんことす。日本の勝利は歴史の保證するところ、人類進歩の促す所、攝理の約するところ、億兆の望むところなり』

それ故に日清戦争の目的は『支那を討滅』することでない。先生は日清戦争の目的如何と云ふ別の論文に於て先づ問を設けて言ふ。

『余輩は問はんと欲す。朝鮮の獨立は支那の廢類より來るか。日本の興起と安全とは支那の衰弱より來るか』

之に答へて言ふ

『東洋の平和は支那を起すより來る。朝鮮の獨立は日本の進歩と共に支那の勃興（眞正の）の結果として來るべきものなり』

それ故日清戦争の目的は支那を滅亡衰頹せしめるのでない。

（日清戦争の義の結語）吾人の目的は支那を警醒するにあり、其の天職を知らしむるにあり、彼をして吾人と協力して東洋の改革に従事せしむるにあり。吾人は永久に平和を目的として戦ふものなり。天よ、此の義戦に斃るる我同胞を憐めよ、

日本國成りてより國民未だ曾て今日の如き高尚なる目的を以て燃えず、今や吾人は一團となりて吾人の讐敵に當らんと欲す。

（日清戦争の目的如何の結語）然り、吾人はアジャの救主として此の戦場に臨むものなり。……東洋の啓導を以て任する日本國の冀望は葱嶺以東の獨立振起より小なる能はず、……君子國の民は何處迄も君子たらざるべからず、義戦は何處までも義戦たらざるべからず。

以上は先生の戦争謳歌論である。當時人々支那に對する憎惡に燃え、その『討滅』を叫びつつあつた時、同じく戦争を歓迎し乍ら、自然科学と世界歴史に關する該博の學問と宇宙と人生に關する深遠の思索と日本國の隆昌と東洋に於ける新文明の興起と而して人類の進歩とに關する輝く理想との合して成りたる國民歌である。見よ、既に『日本國の冀望は葱嶺以東の獨立振起より小なる能は

す』と叫びしことを。誰か其の當時之を冀望し、之をかく明白に發表した者が他に有つたか。

先生の日清戦争の義戦たる所以は日本國が代表する東洋新文明の興隆のためであつた。その新文明の骨子は前に掲げたやうに、『東洋に於ける個人の發達』その自由獨立であり、そして之に基く『自治制度』の確立であり、又新なる美術の創造、文運の興隆であつた。此の義戦論の中核をなすものは文明論である。そして文明の發達、人類の進歩は畢竟個人の自由獨立の上に生じ來るとの見解である。その論據は世界歴史の證明に置かれた。さらば個人の自由獨立は何處から發するか、私は進んで先生の文明論を驗討し度い。

## 文明發達の主動力

先生は人類進歩の順序、文明發達の過程として、世界歴史に深甚の興味を有せられて居たことは、

此の書中史學の研究及び傳記學の研究によつて知られるも、文明發達の原因に關する先生の意見を知らるには西洋文明の心髓を讀むに若くはない。

先生は文明を定義して『文明とは一國民又は一人種の物的、智的、並に心靈的啓發の總計を謂ふ』又西洋文明とは『歐洲人種に由り得達せられたる此の啓發の合稱なり』と言ひ、文明を創造發達せしめるには三つの要素を擧げらる。その第一は人種の素質、第二は知識的系統、而して第三は心靈的同感である。此の三つの要素が交々に且つ互に因となり果となつて文明を創造り出すのである。

西洋文明の物的要素たる人種の要素はアリアン人種の特性がそれである。アリアン人種は其の始め天山山脈の西麓から起つたと言はれ、又スカンヂナビア半島が其の發祥地とも稱せられる。有史前既に東は印度から西は全歐洲を占め、印度、波斯、ギリシャ、ロマの昔、英佛獨伊米の今を包容

する一大人種である。

此の人種の特質は、第一に強健なる抽象力、即ち事物を詳細に觀察して其の内に在る理を發見する力の強大なることである。此の特質ありてギリシヤの哲學と美術とは起り、又現代の科學は發達したのである。此の人種の第二の特質は遵法の精神であつて、自由自治を好み、人に隸屬することよりして自ら進んで法を認め、之に歸順服従する精神である。此の人種的特質ありてかの『人ご人ごの關係を明にし、天賦の權利を重じ、自由平等の大義を指示する法律はその特産物』であつた。ペルシヤの古き法典就中ロマ法は最も顯著である。

『武を以て謂はん乎、匈奴鐵勤は歐亞を征服するに足れり。然れどもタイパー河邊七丘の民にして終に大古の七大帝國を併吞するに至りし事

は、單に彼等の尙武性のみを歸すべからず。兵は應變の具にして法は常治の道なり。アリアン人種の服律性は世界の競争場裡に於ける最終の勝利者として彼等を指定せし如し』

今日の西洋文明は此のアリアン人種の特質の産出した文明と云ひ得るも、然かもその特質が此の文明産出の最大の原動力であつたとは云ひ得ない。それは他にある、然らば文明の第二の要素たる知識的系統がそれであるか云ふに、何る程、ギリシヤは大古の知識を綜合し、集大成し、之に新氣軸を與へ、プラトーンの哲學、アリストテレスの理學は今尙西洋の知識界を指導し、フキチアスの美術、クセノホン・ヘロドタスの史學、エスキラス・アリストファネスの文學等、その文明の發達に貢獻するところ甚だ大であつた。當時のギリシヤ人の智能は著しく發達し、遺傳學者として有名なるフランシス・ガルトンによれば『アテネ人の智能の平

均は最低に見積るも、我ら今日の程度の倍と見なければならぬ。我らと彼らとの比較は丁度今日のアフリカ土人と現今の歐洲人種との比例である。西洋文明は此の著しく發達した智能の產出と云ひ得る。

まここにギリシャの文化は一時花の如く榮え、歴山大王は之をアジヤ、アフリカに傳播し、又十五世紀には文運復興となつて歐洲は中世の暗黒より覺醒して近世の文化を喚起した。然し乍ら此の大知識的系統が今日の西洋文明の最大の原動力と云ふ事は出来ない。若し他に西洋文明を促進し維持せる大なる力がなかつたならば、西洋文明は一時は榮えてもその今日あるを得なかつたであらう。さしにも榮えたギリシャ民族の今日の衰頽を見れば思半に達するであらう。それは何故であらうか。

『智的文明は個人の修養を促すと同時に其の慾心を高め、其の廉恥の念を鈍くし、自己を思ふ

こと切にして他と公衆を念はざらしむ。國家と社會を思はざる個人主義は智的文明の特産なり。……ギリシャ文明の復興は常に道德の紊亂を以て終れり。無神論と優柔なる哲學を産せり。常に識者の自由を讀して、下民の抑壓と無學を來せり。所謂『文學復興』なるものは自由平等の復興を意味せず、大思想の產出を助けず、大發明大探見の原動力とならず……人と人との關係、人生の眞意味、社會存在の土臺的原理……是れ人類がギリシャ人より學び得し者にあらず。』

かの北方の蕃人から文明の發芽を救ひ、獨逸民族を教化啓發した力は他に存した。ラファエロ・ミケロアンゼロの美術の理想、ダンテをして神曲を書かした精神、コロムブスをして新大陸を發見せしむるに至つた動機、和蘭スキスの獨立自由國の建設、新英州の植民、ガリレオ、ニュートンの



科學上の大發見、アダムスミスの經濟學、カントの哲學、此等はギリシヤ思想より出て來ない。

されば『西洋文明の最大主動力はギリシヤ文明以外に求めざるべからず……西洋文明を以て單に智的文明の發達なりと信する者は皮相見の最も甚しきものと謂はざるを得ず。智は之を使役するの意志を要す。智は智其の物をも保存發育する能はず。無究の發達力は智性に存せずして靈性に在り。』

此の故に先生は遂に西洋文明をして今日あらしめた最大の原動力を文明の第三の要素たる『心靈的同感』に求めて言ふ。』

『アリアン文明にあらず、ギリシヤ文明にあらず、西洋文明は基督教文明なり

然らば基督教文明と云ふ基督教とは何であるか『基督教に定義を附するは難し。然れども余輩の稱する其の土臺的教義なる者は之を指定する

に難からず。基督は凡ての教訓を左の二箇條に收めたり。第一、爾心を盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべし。第二、己れの如く爾の隣人を愛すべし。前者は道德の泉源を示し、後者は其の實行を教ふ。人生の最大目的は利を得るにあらず、知を樂しむにあらずして、神を愛し彼に事ふるにあり。而して神に事ふることは……人類同胞を己れの如く愛するにあり。

ギリシヤ人は智を先にし、獨逸民族は力を拜せしに、基督教は其の信徒の崇拜物として謙讓溫和なるナザレの耶穌基督を供したり。ギリシヤ人の理想は練磨せる完全なる知能にありき。

獨逸民族の理想は強健なる我意の遂行にありき。基督信徒の理想は惡意なき心にあり、我意を殺して神意を満すにあり。ギリシヤ人は學者を尊び、獨逸民族は強者に服し、基督教徒は弱者と平民とを敬ひたり。基督教が歐洲社會に大變動

を來せしは主として此の自捐的推察性に因れり。  
 ……社會下層の開發は實に基督教の來臨を以て  
 始まれり。』

ここに摘示せられた先生の文明の原動力は神に對する愛、それが弱き同胞に對して表はるる憐憫である。自己を犠牲として下層民を憐れむの愛である。私はここに先生を動かしたベンヂャミン・キツドの西洋文明論の影響を見る。

抑も先生の基督教は其の始め心情の宗教であつた。先生は一生中度々ネアンデルの『宗教の中核はハートである』と云ふ言を愛用せられた。此の見解は先生の初期の著作傳道に於て最も明瞭である。然し乍らハートより發した先生の宗教は神のハートを求め、その『義』に安息所を得たのであつた。即ち神の子イエス・キリストの贖罪のうちに全き安心を得、人間の愛は神の義のうちに満足を得た。此の事は英文余は如何にして基督

信徒となりし乎、及び求安録を讀まば疑なき事實である。若しそれが只單に人間のハートに基礎を置き、人が神を愛し、又同胞を愛する宗教であるに留まるならば、そして其の上に文明が築かるならば、その宗教と文明とはバベルの塔に異ならぬ。それはバビロンである。大なる混亂は必ずその後に来るであらう。先生の信仰はハートより發したがハートに留まらず、神の義に安じて確固不動、千歳の岩の上に置かれた。されど先生の文明論とそれを論據する日清戦争の義は最後の基礎を基督教に置きつつ、それは神の義にあらで人の神に對し又同胞に對する愛に置かれた。それ故早晚先生の文明論と戦争謳歌論は廢棄せられざるを得ない運命にあつたのである。

先生が日清戦争の義を唱へ、此の戦争を辯護せられた所以は、此の戦争の結果東洋諸民族が覺醒し、個性の尊重、獨立自由自治、而して弱者に對

する憐憫が廣く普及し、新なる文明が東洋に起り、人類進歩史上に貢献することあるべきを豫期されたのである。そしてその根據を西洋文明をして今日あらしめた基督教に求め、東亞に於て諸民族が永き眠のうちに陥れる時、獨り最初に目醒めて基督教の曙光を仰ぎ見た日本が日清戦争に勝利を得ば、之により頑迷無情専制の東洋全體が覺醒し、光は東亞より發して東洋五億の民衆を照し、エホバを知るの知識は全地を蔽ひ、正義は行はれ愛は溢れ、獨立自由而して協和は凡ての人々に在らんとするを思はれたからである。

然るに日清戦役に大勝後の我國の状態を見て、先生はいたく失望せられた。我が國人に何等かかの大理想なく、其の大使命に關して少しの自覺もない。朝野擧げて戦勝の惡酒に酔ひ、精神的に反つて墮落しつつある状を見て、爰に先生は鬩然戦争は決して善きものを持ち來らせず、戦争其の者

が惡であり、惡の果を生ずることを痛感されて、日露战役の生ずるや、敢然立つて非戦論を唱へ、暴力は如何なる目的に使用するも聖化されず、平和こそ人類進歩の途であることを説かれた。然り而して、十數年前西洋文明の中心地歐洲から世界大戦争が勃發するや、文明の如何に果敢なく、その榮華は影の如きものであるかを感じ、人間の努力を以てする平和運動すら全く人類の組織的罪惡である戦争を阻止し得ざるを見て、文明に失望し、人間のハートに失望し、益々先生本來の信仰なる神の義に信賴され、キリスト再臨による新天新地の聖社會出現を仰望せられるに至つたのである。

かくの如く先生の社會觀は變化した。そしてそれは最初から把持せられた先生の信仰の純化歸一であつた。されば私は次いで先生の信仰は當初より如何なるものであつたかを説明せねばならない

(以下次號)。

## 我等の最大事業

藤 本 武 平 二

この世に属ける凡ゆる野心を抛ち、名を千載に残さんとの希望を斷つて、キリストの中に生くる聖徒の群に入りし我等、今より如何なる事業に従事すべきであらうか。基督信徒最大の事業とは果して何であらう。

この世の中にはこの世の人に相應しい事業がある。金銀財寶の蓄積と大邸宅の造營と大事業會社の經營とは、この世の人が名譽と利益とを得んが爲め心血を注いで日夜奔命する所である。選ばれたる我等にも亦我等に相應しい事業がなければならぬ。慈善事業と社會事業と教勢擴張事業とは我等が信仰に入りし時、我等の心を第一に惹き付けた好事業である。我等その何づれをか選ばう。我等は主イエス・キリストに屬くものである。

イエスは如何なる事業をか選び給ひし。我等は之を荒野の試みに於てイエスの答へ給ひし言葉によつて容易に解決することができる。

バプテスマのヨハネより洗禮を受け給ひしイエス水より上り給ひし時天より聲あり、曰く「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」と。御靈イエスを野に逐ひやり給ふや、試むる者來りて、イエスが今しも聞き給ひし天よりの聲「我が愛しむ子」この言葉を引いてイエスを誘惑した、「汝若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと爲らしめよ」と。イエスは神の子たる證據を提示すべく要求され給うた、而してその證據として石をパンにせよと求められたのである。神の子たるイエスにとりて石をパンと爲すも、奇蹟を以て萬民に食糧を豊富に與へて之を養ひ給ふ事も容易であつた。然しこのパンを食ふ者は又餓えん、されど生命のパンを食ふ者は又餓うる事なしであつて、パンを與へ

て人類永遠の救済が不可能であることをイエスは良く知り給うた。彼は慈善事業を起して世を救はんと望を遂に起し給はなかつたのである。

『なんぢ若し神の子ならば己が身を下に投げよ。

それは「なんぢの爲に御使たちに命じ給はん。彼ら手にて汝を支へ、その足を石にうち當つること勿らしめん」と録されたるなり』この試みに對し『主なる汝の神を試むべからず』と録されたり』と答へて、イエスは奇蹟を行ふて即ち手段方法を選ばずして傳道することの非を指摘された。神癒を説く宗教が忽ちにして多數の信者を得る實例は現代日本に於ても數多見る所であるが、かゝる方便を用ゆる事はこれ神を試むる事であつて、イエスの極力排除し給ひし所である。かの英語を教へて信仰に誘はんと試みし外國宣教師の傳道が失敗に終り、讚美歌を藝術化して青年を誘はんとせし教會の傳道が教會を墮落せしめたるはその好例で

はないか。惡魔の人を誘はんとするや屢々聖句を引用する。聖書を引用して無神論を説く事すら可能である、聖書はたゞ聖靈に由つてのみ讀まるべきものである。

最後に惡魔はイエスを最高き山につれゆき『なんぢ平伏して我を拜せば此等を皆汝に與へん』と誘つた。イエスは『主なる汝の神を拜し、たゞ之にのみ事へ奉るべし』この聖書の句を以て答へし、サタンよ退けこの激しい言葉をすら發し給うた。政治家となり仁政を布き民をして平和に謳歌せしめる事は神の子たりしイエスにとつては何でもない事であらう。しかしイエスはユダヤ國を富國強兵となす事によりローマより救はんとし給はなかつた。イエスは全人類永遠の救済のために神より遣はされ給ひし獨子であつた。嘗て牧師傳道師たりし者にして世を救ふは政治の力に據らざるべからずこなし身を政治界に投せし者あるも、彼

等は唯徒らに濁流に身を投げたのみであつて、その多くは遂にその中に吞まれ終つたのである。

イエスはバブテスマを受け給ひし後この試みを退けキリストとして世に立ち給ふたのである。慈善事業よりも社會事業よりも政治よりも更に大切なる救主キリストとしての大事業にイエスは就き給うた。彼は先づ恩恵の福音を説き給うた。眞の愛を表はし給うた。律法よりの解放を叫び給うた。そして最後に彼れの最大事業たりし贖罪を遂げ給うた。十字架にかゝりて萬民の罪を贖ひ給うたのである。十字架の死こそは人類歴史初まつて以來の最大事業であつて、アレキサンダー、ナポレオン、ビーター大帝の事業も彼れの十字架に比較する事は出来ない。ソクラテスも釋尊も孔子も全然問題になり得ない。

ユダヤ國を救ふ事すらせず、何一つの社會事業をすら起さず一つの教會をすら建てず、數人の弟

子を造りしのみにて、その母マリヤをさへ弟子に頼む外なかりしイエス、彼れはいばらの冠を着せられ、嘲弄され唾され、十字架上に盜賊と共に死し給うた。その當時の人々の目には恐らく、いとも憐れむべきイエスと映じたであらう。そして一地方に起りし一小事件としか見えなかつたであらう。嗚呼これが果して千九百年前に於ける小事件であつたであらうか。かれは所謂事業とては何も爲し得なかつた。しかし彼れは如何なる事業よりも更に大なる事業を成し遂げ給うた。彼れはその生命を人類の罪の贖の爲めに献げて、彼れを信する者に罪の赦しを得させ、限りなき生命に入るの唯一つの途を開き給うた。

見よ、今日アレキサンダーや、ナポレオンと人類とは何の交渉があらう。人類より出でて誰かキリストの如く人類の救済に干與しつゝありや。嗚呼キリストは宇宙始まつて以來の大事業家であり

給うた。そして三日目に復活し、後ち天に擧げられ、再臨を約束し給うた。我らの歡喜も希望も永生も凡べてキリストより來たのではないか。

我らは最早や、岩崎や三井の如き巨億の富を持たない事を少しも恨まない。よし我等慈善事業や社會事業等はなし得ずとも我等はキリストと共にありてそれよりも更に大なる事業に携はるであらう。我らは最早やビスマークやグラッドストンの如き大將軍大政治家となり得ない事を少しも恨まない。よし我ら富國強兵によつて日本を救ひ得ずとも、日本に盡くすべき更により良き方法を選ぶであらう。我らはキリストと共に在りて全心全力を盡くして我らの祖國を守るであらう。我らは我らの生命を祖國に献げるであらう。然り我らは人の目に見ゆる事を何一つ爲し得ずとも、我らの生命をもキリストに献げてキリストと共に生き、キリストの御足の趾を辿つて、我らの生命が人類の

ために献げられん事を祈るであらう。

世に大事業とて、友のため敵のためその生命をも献ぐるに優る大事業はないのである。キリストは既に世に勝ち給うた。愛の勝利者である。生命をも神に人類に友人に然り敵に献げて初めてキリストと共に生き得るのである。そして後始めて人はキリストと共に甦らされ、限りなき生命に入り得るのである。我らの従事する職業がよし何であらうと、商業であらうと工業であらうと牧師であらうと、その天職に我らの全き心を與へよ、我らの生命をも注げ。事業の盛衰は問題でない。福音の證明のため我らの生命を献げよ、これに優る大事業は他にないのである。

## 柏 木 通 信 (第三信)

齋 藤 宗 次 郎

小國傳道。今より約五十年の昔、内村先生が米國遊學中、獨故國の地圖を繙きて愛國心の胸宇を衝き來るや、地の隅々までを凝視し熟慮したる結果、東奥山形縣下荒川上流の盆地小國の郷を指して、其熱愛の滴りを點下せられた。而して其純朴なる農民の靈に十字架の福音を扶植することは、日本國を濟ふ所以であるを信じた。誰一人知る者なき此一場の夢の如き希望は、熱き祈となつて靜かに神の御懷へと隠れ去つた。黙々として過ぎ逝くこと將に幾星霜。水の上のバンは遂に生命と化して現はれた。小國傳道は忠實なるキリスト信徒たる二三の青年が、先生の精神を受けて献身の擧に出でしに始まり、之を繼續すること茲に七回、一九三〇年夏期に於ては、政池鈴木の二氏其重任に當つた。數ヶ所の小學校舎を本陣としての活動の狀況は、初秋の交二回に亘つて報告せられた。我等は播く者の犠牲と忍耐とに就て感謝し、若き人々の靈に萌え出でし信仰の幼芽の爲に其成長を祈つた。讀者諸君も亦此尊き主の御業を想ふの特權に與らんことを望む。

初秋福田裏三氏の歸國は突然であつた。彼の五年の米歐亞遊學を如何に送り來りしかは知友の等しく知らんとする所であつた。彼は不信のアメリカに在つて、キリストの贖罪と復活の眞理とを獲得して外遊の目的を達せられ、パレスチナを旅行し舊約聖書に新たなる光を發見した。西亞の遍歴も所謂月並の聖地巡禮ではなかつた。イエスの福音の何であつたかに目覺め、恩師に學びし神の御心を確かめて歸つた。我等の前に述ぶる所の彼の聖書の話は、神學でも註釋でもなく、生氣溢る、純福音の眞精神である。此兄弟を迎へて我等に喜びなきを得ない。

十月十二日鎌倉に集れ!! 是れ亦我等に取つては霹靂の聲であつた。代表の我等數名が衷心の服従と歡喜とを以て行つて見れば歴史に名高き扇ヶ谷の巖窟に隣れる所、去れど攻防の軍略とは正反對の會合。イエスの愛を以て永久に自他を占領するの道は示された。一同の靈魂は慈雨に潤さるゝの感に滿されて散じた。今は其深き聖意の程を知らない。必ずや「後知らん」である。

十一月十日『新約之研究』創刊號現はる。主筆鈴木俊郎氏の信仰は今や花となつて咲き出でたのである。聞きしや、「雜誌の洪水遣り切れない、併合しては如何」の聲を。我



等は祈る。尙も多くの十字架本位の信仰雜誌を賜はらんことをと。神は之を起し之を用ひて滅びの靈を救ひ、惡魔の狂暴を驅逐し給はん。又思へ、凡ての主筆其他の執筆者の勞苦を。而して一人の善き牧者の御手に養はる、我等同信の輩は、眞率なる態度を以て之を尊敬し同情し、出來得る限りの援助を敢てして、神と先輩友人との聖業に參與するの恩寵に預るは、天の父の需め給ふ所なるを知らずや。

十一月十五日教友山崎鶴松兄の告別式を柏木今井館に於て行つた。彼は多年古河礦業會社の事務室を本城とし、左肺の病み碎けて滅却し居たるをも打ち忘れて業に盡瘁し、終に算盤を枕として職務に討死した。彼の三十餘年の沈黙の活動的生涯は、能辯に福音を證明した。新日本の建設は、此種の隠れたる犠牲者を要するのであらう。

十一月下旬伊豆半島大に震ふ。誠に警告の響きてある。愛なる神が道に悖れる我等日本人を呼び醒さんが爲に、半島幾萬の同胞は全國民の爲に犠牲を拂つたのである。此報に接して我等は心を協せて祈り、私は選ばれて親しく震災地を見舞ふこと、なつた。

盲人なる教友伊藤福七氏は、同じく目暗き二人の同志を伴ひ、既に出發して彼地に向つた。寢具其他を背負ひ、一

本の杖を便りに痛く破壊されし險路を恐れなく進んだ。救護に忙殺さる、役場警察の手を煩はすことなく、三島韭山長岡修善寺八幡伊東の間に、三十餘人の可憐なる被害盲人を探し當て、慰めと勵ましと施しに眞心を傾け、身は綿の如く疲れ果てながらも、感謝と満足とを懷いて四日目の夜家に歸つた。

私の訪問も亦三島町より久連修善寺伊東を經熟海に出た。全國より寄せ來れる多くの慰問品を見、教會婦人會其他の協力に成る托兒事業を見、遙か遠方より援助の爲に馳せ來りて、多くの人々が塵埃汚泥の中に立ち働くを見、眞に愛の力の偉大なるを感じた。常に此心を以て神と人とに對するならば、忌はしき問題の起るべき譯なきを知つた。

私の尋ねたる教友には、身にも家居にも多くの傷害を被りし人々のあるを見た。然し彼等は一樣に温かき胸を開いて舊知の友の如くに歡迎優遇して呉れた。或る姉妹の如きは二十餘年間研究誌讀者たる亡兄の寫眞を示し、自らの苦痛をば忘れて、内村先生の永眠を悼み、其鴻恩を感謝するの言葉を連ねて歌まざる人もあつた。聖書と舊き研究誌とを唯一の友として徐ろに信仰に培ひ、地方の柱石として選ばれし使命を遂げつゝある此等の教友と、親しく相見相語

る時に、初代信徒を想起した。

久連の興農學園に達した時には、平林先生の下に、學生擧つて托兒所の準備中であつた。私も久潤の謝辭挨拶を略して直ちに其手傳に取掛り、聽て仕事は畢へた。内村先生の一言を實現したる農村の幼稚園を觀た。此處にも恩師を紀念する興味深き物語を丘上の密柑畑に立つて聽いた。今宵の宿りを此所にとの好意を辭して、冬の日の傾く頃に去つた。別るゝに臨んで始めて先生も亦倒れし本棚に撃たれて左肩の大負傷を纏帶し、疼痛不隨意の身であることに氣付き其恩愛謙虚の態度に敬服した。明治二十五年以來恩師の教に浴せしといふ、伊東町飯島氏の涙ながらの祈、熱海靜養中なる蘆花夫人の物語なき、歸つて柏木の教友に報ぜし時に、一同感激した。

十二月二十四日夕四十七人の教友相集り、追想と待望とを新たにして讚美と感謝と祈を捧げ、靜肅にクリスマスを守つた。

## 自由

佐々木良伍

我が意の儘を成さんとの自由では無い。身も魂も目的も生活も只獨り神の意志にのみ仕ふるの自由である。

獨り足りて獨り悦び、騒がず焦らず自身を鞭打つ事をせずと雖も、『我は我に力を予ふる基督に因すべての事を爲し得る』(ピリピ四ノ一三)。キリスト臨りて靈魂の衷深き所に住み給ひ、絶えざる聖靈の力を泉の如く供給し給へば、我らは實に己を得ずして愛し且感謝し且働くのである。

さは云へぎクリスチャンは自己に何物をも持たない。故に惟り自何事をも爲し得ない。『汝等我を離る、時は何事をも行し能はず』(約一五ノ五)。然り世に憐なる者にしてキリストを離れたるクリスチャンの如きは無い。

我等のうち肉は縛らるゝ者もあらう、神は必ずしも其愛子に外なる自由は賜はないかも知れない。然し乍ら内なる魂を罪の羈絆より解いて、彼をして外なる鎖に繋がれながら向心は歡喜に溢れて神を讚美せしめ給ふ。

# 編輯餘録 主筆

○本誌と柏木教友會との關係の實相を知りたく思ふ私の友人が多い。それ故爰にその寄稿を承諾した顛末を當夜手記した私の日記より抄録して置こう。

○藤本武平二君より面會の申込あり何か少し重要な用件の如く思はれた。十月十二日同君及び名古屋常治、齋藤宗次郎兩君（山栞儀市君は所用缺席）柏木の教友を代表し、藤本重太郎及福田襄二兩君同伴來訪、當方よりは山田幸三郎君が立會はれた。

○藤本武平二君の申出左の如し。  
一、内村先生は逝去の後には内村聖書研究會解散の意思を有せられて居たと同時に會合は持續を希望せられた事も明白であつた。それ故我々は研究會解散後先生の希望に副はんとして柏木教友會を組織した。此の事情の了解を得度い。

二、聖書之研究誌廢刊せられて、地方の舊讀者中柏木の其の後の事情を知り度く思ふ者多く、此等の人に何等かの方法を以て適宜の報道をし度い。然るこころ貴雜誌は明年から擴張せられる由聞及んだが、其の紙面の一部を

當方の寄稿に割愛願はれ間敷くや。  
三、雜誌編輯については或は今後編輯會議のやうのものを開き方針を決定し、又は雜誌の事務は當方にて取扱ひ、貴方には原稿料を差上げてよいこの腹案もある。

○右に對して私は次のやうに回答した。  
一、私は何人ともその信仰の自由を尊重する。今柏木に教友相集り、會合を催し、團體を組織せられる事には何等の異存はない。若し之に反對し干渉する者あらばそれは無教會主義の何たるかを知らない者と思ふ。

二、柏木教友會なるものが設立せられた以上の其の標榜する旗幟を鮮明にせられんことを私は希望する。教友會としては之が最重要のことと思ふ。先日私に會見申込の手紙によれば私の從來雜誌に唱へ來つた純福音主義即ち純恩惠主義に全然同感の如く思はれた。若しそうであるならば、私の信仰と全く一致する。私は喜んで貴會に賛成し、協力し、其の寄稿を私の雜誌に掲載することを承諾する。

三、雜誌の編輯に關しては私には一個の考がある。それは信仰の雜誌は是非何人かが全責任を以て、全く獨立、全く献身的に之に當らねば決して力ある雜誌は出来ない。それ故他

より掣肘を受くべき俱ある編輯會議は好まない。まして會計を他に委嘱し、原稿料を頂戴すること乎、それ故私の雜誌は私の獨裁であることを承認せられ、原稿の採否、時期等一切主筆の自由にて委せられ、單に寄稿家とならんならば、兩者共に純福音主義に立つ間はいつまでも關係を續け度い。若し私が主義に反したと見られたならば、何時でも一片の葉書の通告にて足る、此の關係を斷絶され度い。

四、我らの據つて立つ純福音主義は他を排斥し、又之と戦ふことではない。それ故に他の如何なる友人でも我らと同様の信仰に立たるべきは何時でも之と一つになる用意が必要である。我らは全世界のキリストを信する者を兄弟と思ふ。内村先生逝去後福音の光を我國に輝かすことは我ら弟子たる者の大なる責任である。大に奮起しやうではないか。

○かくて我等皆聖靈に滿され、福音のために献身協力する事を誓約し之に署名して散會した。記念すべく感謝すべき日であつた。  
○雜誌に他の兄弟を誹議するやうな事を書くのを互にやめやうではありませんか。『互に徳を建つる事を追求むべし』です。

# 内村鑑三先生

## 記念會

日 時 三月廿八日(土)后一時  
會 場 柏木今井館

## 同 記念講演會

日 時 三月廿九日(日)后一時  
會 場 日比谷、市公會堂

司會者 藤本武平二氏

講演者 畔上賢造、塚本虎二、

三谷隆正、石原兵永の

四氏

會 費 二十錢

(昭和三年二月十六日  
等三種郵便物認可)

聖書之真理

第四十一號

(昭和六年三月一日發行  
毎月一四二日發行)

### 内村全集編輯に就き廣告

目下内村全集刊行ため先生の著作講演書翰等を鋭意蒐集中でありますが、何分五十餘年に亘る長年月のものを全部網羅して遺漏なきことを得るには是非多くの人々の助力によらねばなりません。それ故、若し讀者諸賢で何等か之に關する資料を有せられ、又はその在所を承知せらるゝ方がありましたらならば、編輯部宛通知を仰ぎ度くあります。尙先生の書翰貸與を依頼されました方は至急御送附下さるやう御願します。

東京市外濠橋柏木九一九、内村方  
内村全集編輯部

### 鎌倉聖書塾廣告

當塾の聖書講義は目下毎日曜日午前十時半開講約一時間半、講師は江原萬里及び山田幸三郎の兩名、目下夫々ロマ書及び四福音書を講義す。塾員にあらずして聽講希望者は豫め葉書にて承諾を得られ度し。聽講料一回三十錢を要す。

當塾附屬日曜學校にオルガンがほしくあります。誰か御不用のもの御所有ならば譲受け致し度し。鍵數及年數、御希望價御知らせ下さい。

### 聖書の真理定價(送料共)

一 部 二十錢  
半年(六部) 一圓十錢  
一年(十二部) 二圓十錢  
海外一年分 二圓六十錢  
拂込は振替東京六三三七五番  
聖書の真理社宛のこと

### 思想と生活合本

第一卷 二 圓 送料八錢  
第二卷 一圓八十錢 送料六錢  
第三卷 二圓三十錢 送料八錢

昭和六年二月二十五日 印刷  
昭和六年三月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三  
編輯印刷 兼發行人 江 原 萬 里

發行所 東京市外濠谷町向山九七  
聖書之真理社

名古屋市中區流川町一八  
印刷所 一粒社印刷所

東京市外柏木九四六  
發賣所 獨立堂書房

振替東京一九四六八番

定價二十錢